



畳の表替えの作業。手際よく畳表と畳床を引き剥がしていく。動作に一切の無駄がなく、あっという間に作業は完了した。

道具の多くは父から受け継いだもの。"へりひき"というこの道具は、先が欠けては研ぎを繰り返すため、長さがまちまちになっている。

一枚の畳に込める 職人のおもてなし

一昔前までは和室が主流だった日本の住宅。しかし、暮らしの洋風化に伴い洋間が増え、和室は減少し、畳業界の需要も右肩下がり状況だという。そんな中、業界全体を盛り上げるため、自らご当地ヒーロー"タタミマン"として活動する畳店店主の山本氏に話を聞いた。

——職人の“当たり前”を
いかにお客様に伝えていくか——



山本畳店 店主 山本 博一さん
Hirokazu Yamamoto

Q. 職人を志したきっかけは何ですか？

車が好きだったので、高校卒業後の9年間は自動車整備の仕事をしていました。畳職人の父は非常に頑固で、昔ながらの職人そのもの。そんな父と一緒に仕事をするのは大変だと思いましたし、気恥ずかしかったので避けていたのだと思います。畳職人の仕事はずっと重労働。父が年齢を重ね、重いものを持つ重労働。父が年齢を重ね、段々と腰が曲がっていく姿を見て、自分が継ぐことを決心しました。

Q. 技術が身に着くにはどれくらい時間がかかりますか？

一通りの仕事が出来ようになるまで最低でも5年はかかると思います。私はすべての技術を父から学びました。父は昔の職人なので、技術は見て盗めという感じだっ

たので、その分時間はかかったのかもしれませんが。今は専門学校などもあるので技術を身に着ける時間は短縮できると思いますし、自分に後継者が出来れば具体的に指導しながら教育していきたいと思っています。

Q. 職人としてのこだわりはありますか？

畳は自然の素材でできているので、湿度や湿度によってわずかに形を変え、まるで呼吸しているように、膨らんだり縮んだりを繰り返しています。そのため、画一的に仕上げてしまうと乾燥する冬に隙間が生じてしまうことにつながるので、すっきりと収まるようにその都度仕上げを考えなければなりません。最近では機械で量産された畳も出ていますが、職人が一つ一つ仕上げたものには到底及びません。畳を敷く現場をあらかじめ熟知し、その現場に適した畳を作ることは機械には出来ないと思います。長い年月をかけて蓄積された職人の勘が、最適な畳を作り上げているのです。

Q. タタミマン誕生のきっかけは？

長い年月をかけて、日本に根付いてきた畳という文化。家上がる時に靴を脱ぐ日本では、柔らかな畳の質感が適していたのだと思います。しかし、一昔前まで当たり前のように暮らしの中にあった畳が、今や当たり前ではなくなくなっています。ご年配の人は畳の良さを知っていますが、今の子どもたちや子育て世代はそれを知らない人も増えてるように思います。そこで、若い人たちにも畳の良さを知ってもらおうと、

Q. これからの課題はありますか？

地域イベントに向いて畳職人としてPRしていましたが、耳を傾けてくれませんでした。何とか話を聞いてもらう方法はないかと悩んだ挙句、子どもたちのヒーローに変身すれば話を聞いてもらえるかもしれないと思い、タタミマンが生まれました。

目に見えない気遣いや思いやりを知ってもらうことが大切なのだと思います。これまで職人が手掛けてきた当たり前のことを、いかにきちんとお客様に伝えるかがカギです。例えば、畳職人であれば誰しも、敷いた時の段差を極力減らすために畳の縁に"ねじわら"という薄いシートを入れて調整をしています。シートは3ミリ程の厚みなので外見上は分かりにくいのですが、快適な畳の裏側には職人のこういった気遣いが隠れている。職人は口下手な人が多いし、当たり前のことなら伝える必要はないと思いがちですが、そういったことを丁寧に説明していくことが必要な時代を迎えています。安価な大量生産品ではなく、職人が手で一つ一つ仕上げたモノの価値をお客様に気付いてもらえるよう努力しなければなりません。



和の伝道師として日本の畳文化を伝える"タタミマン"。業界だけでなく地域全体を盛り上げるため活動している。

畳の縁に入れて調整する"ねじわら"という部材。これを入れる枚数を変えることで、真っ平らで気持ちの良い和室が出来上がる。

畳の縁(へり)を取り付ける作業。畳の角をしっかりと出すために縁の布の下には厚い紙が入られている。この折り方一つで敷かれた際の畳の収まりが左右されるので、丁寧にまっすぐ角をつける必要があるのだという。

